

ひみ漁業交流館 魚々座 『魚々アーツ』

開催期間：平成28年4月9日（土）～平成28年10月30日（日）



【企画展の内容・目的】

- 館内に張り巡らされた氷見発祥の越中式定置網と、漁具・民具約4000点の常設展示を活かしながら、見るだけではなく、話を聞く、味わう、調べる、実際に使ってみることを通して、「和船 ReBirth～めぐる まわる 海と山～展」「タコカプセル展」「纏うさかな展」「いろんな魚知ってるもん～知るからはじまる魚食展～」の年間を通した企画展を開催。地域に根ざした海洋文化への学びをより深める機会を創出。
- 木造和船や伝統的漁法、魚食文化などアートの多様な視点から、海の学びに通じる様々なプロジェクトを展開。一般参加者もプロジェクトに参加できる付帯事業を行う。プロジェクトの過程や付帯事業の様子を展示に組み込むことで、「海」に対して体験型の学びの場を作り出す。

1. 企画展示の内容

- 開催期間：平成28年4月29日（金）～平成28年10月30日（日）
- 開催場所：漁業交流館 魚々座
- 入場者数：16,796人



魚々座 外観



企画展会場 入口

「和船 ReBirth～めぐる まわる 海と山～展」



アートプロジェクトの中で制作した五艘の 現役の和船を一同に展示。2005年に木造和船と氷見のつながりをリサーチプロジェクトで掘り起こし、2006年から2008年に行った木造和船が復活のためのドネーションプロジェクト、そして40年ぶりに氷見に木造和船が復活するまでを紹介。なぜいま和船が作られるのか、どのように使用されているか、それはかつて山と海に恵まれた自然の循環から生みだされたものであるということなどを、写真やパネル、映像で展示し、和船やその文化について伝えた。

テント船（全長9m）天馬船（全長4m）3艘、田舟（全長6m 予定）の全ての和船は、見るだけでなく、実際に触れたり、船に乗ることができる。

また、一艘の天馬船は空中に浮かせて展示し、船の揺らぎを体験でき、船を通して海に親しむ展示とした。実際に乗ったり触れたりできる事で、海で船に乗ってみたいという気持ちを促し、海に親しむきっかけとなった。

「タコカプセル ～時と海と、おらっちゃんを繋ぐ～展」



実際に使用された漁具と、海と山と和船のつながりのパネルを展示。
船大工は船を作る木を求めて山に入り木が切られたり、竹や桐で浮きを作るなど、船や漁具を作る事が、山の整備につながり山を豊かにしたこと、また、山が豊かになると、養分が里に流れ田畑を肥やし、切られた木は川を使って海沿いの造船所に運ばれ、船大工は船をつくり、漁師は魚をとり、大漁の時には余剰の魚を田畑の肥やしとし、船が古くなると朽ちて土となったこと、など、かつてあった山川海の連環や、自然のサスティナブルなつながりを学ぶことを促した。



制作した木造和船を実際に川や海に浮かべ、イベントやプロジェクトで使っている様子を写真で展示。また桜天馬やテンマッチの様子などの映像を上映。漁師ではない様々な人が和船に乗り、櫓をこいで、楽しんでいる様子を見ることにより、和船に乗って海に出て、船を操り海と向き合う気持ちを誘発する機会とした。

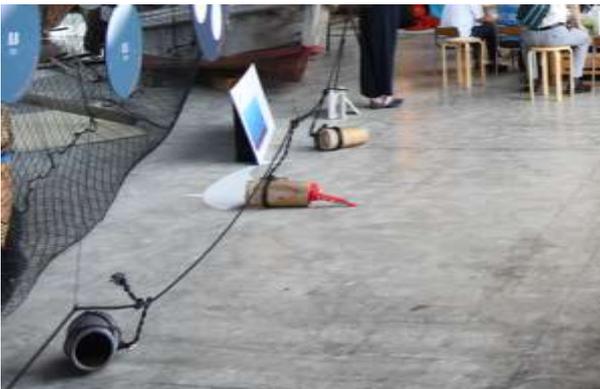


氷見の里山から採ってきた木や葉っぱを使って、氷見の海や川などの「水辺」にあったらいいもの、川からつながる里山にあったらいいものを作る参加型展示。
自分でイメージした水辺を、自然の素材で作ることで、里山の木々、川や海の魚たち、そして氷見の自然を改めて見つめなおし、自分たちの生活を取り囲む自然の循環を考える機会となった。



『タコ壺があなたに代わって海に潜るカプセルとなり「あなたと海」「過去と今」をつなぐという企画展。館内常設展示の漁具・民具約 3000 点のうちタコ壺を取り上げ、鑑賞するだけではなく、話を聞く、味わう、調べる、実際に使って見ることを通じて、地域に根ざした海洋文化への学びをより深める機会を創出した。

古くから海が非常に身近であったこの地域の文化を、タコ壺漁を通じて子供や子育て世代に伝えることで、次世代にも海洋文化・地域文化を伝えていく。またアートが介在することで身近に漁業と接してこなかった人たちにもユニークかつ新鮮な角度で海洋文化・地域文化に親し見やすく表現した。



氷見における、タコ壺漁の仕組みがわかるパネルを設置、その周りに竹筒や陶器のタコ壺を実際に漁で使用しているロープに漁師さんから教わった結び方で固定。海におけるタコ壺の様子や船上での作業を具体的・立体的に理解・想像できる展示とした。

網や針などを使用する通常の漁とは全く違う漁法であるタコ壺漁。薄暗い岩穴などを好み、捕食のため砂地で活動するタコの生態や、タコがくらす海底も含め地域の海全体について、一般の方にもわかるように展示を構成した。

地元の漁業関係者にとっては当たり前のことを、観光客や地元の子供達にもわかるようにしたことにより、蛸壺漁に興味を持ってもらい、また氷見の海の豊かさも感じてもらい、地域の人たちが日常生活の中で伝えてきたことを「海の学び」として感じてもらうことができた。氷見やその近辺でタコ壺漁をしていた方々のインタビューをモニターで放映。その周りにインタビューから抜粋したコメントを誰がどの発言をしたかわかるようにし展示。海に向かい合う姿勢や、海がもたらす勝ち、海への思いなども聞くことができた。またすぐ近くにはタコを特集した図書なども設置した。

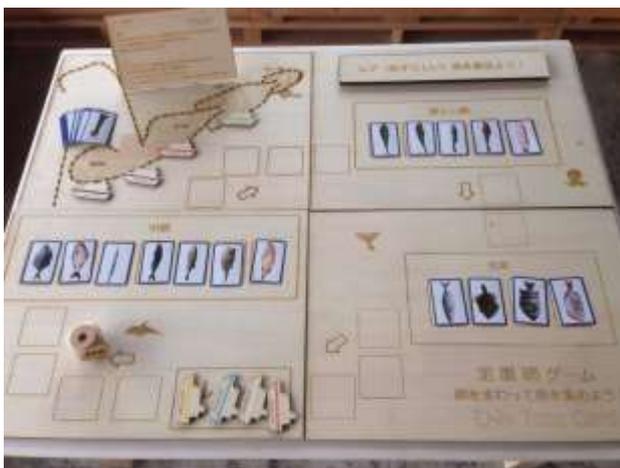


漁業権で、通常漁師以外とってはいけないタコ。しかし蛸壺を海に入れタコを取るという行為は、とても単純であるが、漁業の魅力の一つであるギャンブル性を体験することができる。そこで、地元の漁師さんに協力いただき、蛸壺漁を行うプロジェクトを実施することができた。そのプロジェクトの様子を、写真や映像で展示した。

蛸壺を作る過程から、海に沈め蛸壺漁を行う様子など、プロジェクトを行う日にちごとに丸いパネルを設置し、写真や映像で展示。夏休み期間中は、小学生や社会人向けのタコ壺漁を行う付帯事業を多数企画。実施した日付ごとに動画・画像・手書きのコメントなどを添えて紹介した。

展示会場の最後には鑑賞者や参加者が企画に関して自由に意見を書き込めるコーナーも設置し、来館者が感じた事をテキストやイラストにしてもらった。これらは、後から見た来館者に対しても、どんな人が参加しどんな事が起こりどんな反応が寄せられたかを伝える役割を持ち、より豊かに今企画や海と向き合う仕事や暮らしに関心を持ってもらうことができた。

「いろんな魚知ってるもん！ ～知るから始まる魚食展～」



魚の町氷見において、“氷見プリ”に匹敵する価値は、実は“雑魚の種類豊富さ”である。その価値を伝えるため、漁村や漁師、山村の農家など地域の人をも巻き込んだ体験型の展示を行った。

氷見の雑魚を取材し、これまで馴染みのなかった魚の種類や特徴に親しめるようなカードゲームをアーティストの手により制作展示。今は価値が低い魚も、アートの視点で魚を捕らえなおし新しいアプローチをすることで、個々の魚に対する価値観を変化させ、興味喚起を図った。



会期中は定期的にボードゲーム大会を開催し、スタッフが積極的に来館者や市内の魚や漁に詳しい方の参加を促した。これにより、来館者はゲームの仕組みから魚に親しんだだけでなく、定置網漁に詳しいスタッフの説明や、市内の魚や漁に詳しい方の話を聞くことができ、漁業文化への理解、および海の魅力に対する理解がより深まった。

スタッフの声がけにより、地元の小学生だけでなく、市内外・県内外を問わず親子連れやシニア世代の夫婦など幅広い地域・年代の方が参加。ゲーム性だけでなく、みんなと勉強しながら楽しめたという点に満足を感じていただいた。「アジやタイは知っているが知らない魚が多い」、「切り身しか知らなかった」、「はじめて魚の姿と名前が一致した」という感想のほか、定置網の仕組み（生産調整の役目をもつ「金庫網」のことなど）や氷見が定置網の発祥であることなど、少し深い知識についても関心を持ってもらうことができた。

「いろんな魚知ってるもん！ ～知るから始まる魚食展～」



海に囲まれ魚食文化が発達している日本では、魚＝食用というイメージが強く、魚皮など廃棄物と見なされる傾向が強い。本展では魚が食用にとどまらず身につけるものの素材としても利用できる可能性を示し、海洋資源の新たな価値や有効な活用について学ぶ機会を創出した。

展示においては魚革を使った靴や衣類、装身具などのプロダクトを紹介し、魚種による差異・持続可能性について・魚革の生成工程・歴史的または民俗学的な事例や海外での普及状況を提示したパネルを展示した。3足の靴は展覧会用に製作され、魚皮という食用イメージを覆すように美しく洗練された意匠を強調したもので、ベビーシューズ、氷見の和船をイメージしたプラットフォームシューズ、魚鱗のアクセサリーを持つ繊細なハイヒールが展示された。いずれも地元氷見産の複数の種類の魚皮を使用している。



二つのパネルで魚皮の意外な使用例を提示した。魚皮衣が歴史的に世界の各地で使用され、つい最近まで実用的な民族衣装として使用してきてきたことについて説明。別のパネルでは主に欧米のブランドやデザイナーから近年魚革が注目され、多用されるようになってきていることの意外性を提示した。

また氷見で採取され、ワークショップでなめし加工された各種の魚革、大型のブリから、小型のトビウオ、模様のあるシマダイなどの差異を実際に手にとって確認できるよう着脱式のサンプルとパネルで展示した。



展示台を使用したパネル展示により、ワークショップを例に、魚の皮を「なめす」工程を整理し、平易に解説した。これにより複雑で専門家以外にはわかりにくい加工技術を鑑賞者が追体験するように理解することが可能となった。なめし加工の解説と共にワークショップの紹介を兼ね、その隣にワークショップの成果物である魚皮のサンダルと魚鱗のアクセサリーを実際に手に取って見ることで確認できる位置に展示した。これにより、ワークショップの過程と制作した結果が連続して把握することが可能となっている。

【来館者の声】 ※アンケート回答結果をもとに、簡潔に記入。

- 実際にあったら行きたいと思う海ができました。（ウラウラな水辺を描こう参加者）
- 海をきれいにしたら魚が多くなるから海を守りたい。
- 和船が自然と共存していることを知り、今現在、海が汚染されていることを聞くと、和船がもっと普及したらいいと思った。
- 山から海につながっているので、自然は大切にしないといけないと思いました。
- もっと海について学んでみたいと思いました。
- 人の手を感じられる和船展示を見て、人の歴史と思い、温度を感じ、”海イコール人”ということを考えることができました。
- 海が生活、暮らしと結びついていた昔を感じました。
- 海は大事にすると、海がきれいになると思いました。
- まだ海について知らないことがたくさんあることがわかりました。
- 海の資源として見落としたものがあることを知りました。
- 全ては海から生まれるとよく言われるが、自分たちがゴミと思っているものは、実はゴミではなく、捨てるものはないのか？
- 靴がきれいで、とても魚の皮とは見えなかった。
- 貴重な研究。自分たちが食品として扱っている魚に素材としての価値があることが分かった。

2. 関連事業の内容

■「さくら天馬遊覧」

【開催日時】平成28年4月9日（土）、10日（日） 10:00～15:00

【開催場所】湊川周辺

【参加者数】120名

【実施内容・目的】

- 氷見の桜の名所、湊川に2艘の天馬船を浮かべ乗船体験を行った。復活させた和船を現代にどのように活用し、人々の生活に根付いているかを体感してもらうことができた。
- 乗船体験することで、実際に船を漕ぐことへの関心を誘い、技術の継承の機会を作ることができた。



開催場所の様子



説明の様子



桜の名所で気軽に楽しめる天馬船の乗船体験。自分で櫓を漕ぐことはできなくても、櫓で動く和船に乗り、水辺の揺らぎを体感することで、船に対して親しみを感じ、同時に櫓を漕ぐことへの関心を高める機会となった。中には櫓漕ぎを希望し船頭に教えてもらう場面もあった。



船頭は櫓を漕ぎながら氷見の海について語ったり、舟歌を歌う場面もあり、乗船した人には、この地域ならではの和船を通じた海と人とのつながりのある暮らしを体験する良い機会となった。

【来館者の声】

- 川から海に水は流れていますので、そこに船が浮かび人も海と関わってきたのだなあと感じた。
- 船頭さんの歌が聞いてよかった。昔は、海と人は近い存在で、親しみを持って生活していたのだろうと感じた。
- 天馬船が海を行き交う姿を見たい。

■タコ会議&日比野克彦 タコ壺ワークショップ

【開催日時】平成28年7月4日(月) 14:00 ~ 16:00

【開催場所】ひみ漁業交流館 魚々座

【参加者数】30人

【実施内容・目的】

●タコ壺漁体験したアーティスト日比野克彦氏と氷見や近辺でタコ壺漁を行っていたタコ名人との、タコを語るトークイベント「タコ会議」を実施。また、日比野氏によるオリジナルタコ壺づくりワークショップも実施。タコ壺漁に関するリアルな話と「アート」という要素を入れてオリジナルタコ壺を作ることで、多様な価値観で海を捉え、海に関する興味を喚起させた。なおこのイベントを企画展のキックオフパーティーとし、企画展全体の盛り上げにつなげた。



蛸壺を囲んでタコ会議の様子



日比野克彦氏タコ壺漁体験



日比野克彦氏と、早朝の蛸壺漁へ。そこで蛸壺漁の一連の流れや、蛸壺漁を通して氷見の海についての情報を体感。その後、とったタコを調理し、「タコ会議」の準備を行った。タコ会議では、地元漁業関係者を交えて日比野氏にも「タコ会議」に参加。多くの方にとって、食べたことはあるが採ったことはないタコに関して、漁業関係者と一般の方の間にアーティストという特別な介在者を設け会議全体に、より豊かで活発な質問や発言を促した。一般の方にとって情報も経験も少ない「タコ壺漁」に関して、アーティストを通じて、自由で多様な、興味や知識を得る雰囲気となった。



アーティストの存在によって活発になった「タコ会議」。目の前にある様々なタコ壺の詳細な使い方や、タコの寿命など、タコにまつわる様々な質問や情報が飛び交った。

実際のタコ壺を手に取りながら漁師さんにタコ壺の仕組みを教えてもらうなど、普段漁業に関わっていない方々の素朴な疑問や興味の質疑応答となった。



日比野氏によるオリジナルタコ壺ワークショップ。「タコ会議」で得たタコ壺漁の基礎知識を踏まえつつ、日比野氏主導のもと、かつてタコ壺に使われていた竹筒に装飾とオモリを兼ねた小石をセメントで貼り付け、餌となる魚の模様など参加者の思い思いのイメージを制作した。「タコ会議」で得た事を、タコ壺ワークショップで反映することによって、より深くタコ壺漁・タコの生態・地域の海、を感じてもらうことができた。

【来館者の声】

- 日比野さんのワークショップに参加できて良かった。
- タコ壺に興味を持つ人が、意外にたくさんいることに驚いた。
- タコ壺漁を通じて、氷見の海を知った。

■ 「天馬スクール」

【開催日時】平成28年7月24日（日） 13:00～16:00
（その他7月31日・8月7日・8月14日）

【開催場所】富山県氷見市中央町7-1 漁業交流館 魚々座そば

【参加者数】22名

【目標・内容】

- 木造和船の櫓漕ぎを見て技術を学び、実際に漕ぐ体験を行うワークショップを開講した。また、子どもの頃に和船を遊び道具としていた地元年配者から、海で遊ぶ魅力を聞きながら、櫓漕ぎ指導とロープワークなどを教わった。
- 船を漕いだりロープワークを体験することで、海が近くにある生活について考えるきっかけとなった。



開催場所の全景の様子



説明の様子



地元年配者から、海で遊ぶ魅力を聞きながらの櫓漕ぎとロープワークを学んだ。子ども達には、普段身近だけれど関わりが少なくなった、海との関わり方を再発見するきっかけができた。



子供達にとっては、年配者から教わることを通して世代間交流のきっかけとなり、技術習得以外の体験にもつながり、実際に海と生活との関わりについて考えるきっかけとなったようで、「海を守りたい」という感想も聞くことができた。

【来館者の声】

- 船に乗って海に出てみると、海の広さや、海を汚してはいけないということを感じました。
- 学んだことは、まだ海はきれいにできるということです。
- 和船を漕いで海に出て、自然の大きさを感じました。
- （船を漕いでみて）昔の人の気持ちに寄り添えた気がしました。
- きちんと使いたいから、自ら海をきれいにしたいと感じました。
- 海が汚れていました。たくさんの魚が住んでいるのに可哀想だと思いました。絶対汚したくないです。
- 森と海はつながっていることを学びました。プラスチックだと自然に戻らないことがわかりました。

■こども タコ体験

【開催日時】平成28年8月13・14日（土日）/20・21日（土日）
1日目13:00~16:00 2日目9:00~12:00

【開催場所】1日目ひみ漁業交流館 魚々座 2日目氷見市小杉浦

【参加者数】27人

【実施内容・目的】

- 親子向けの2日間連続の体験プログラムを2回実施。1日目はタコ壺漁のレクチャーとオリジナルタコ壺作りのワークショップ、2日目は魚船で海に出てタコ壺漁と、調理を体験。2日間かけて、レクチャー、ワークショップ、船上での作業など多角的な体験を通じて、地域で受け継がれてきた海の文化を知り、それに従事してきた人に親しみ、魚食文化や海に対する、親近感や好奇心を持つ事を目的とした。



二日目の会場となった氷見市小杉浦



一日目の会場でタコ壺のレクチャー



一日目は、展示物のタコ壺を使ってタコ壺漁の概要を説明。ところどころクイズを出し、海やタコ壺漁への好奇心を引き出し、子供が退屈しない工夫を行った。その後、竹筒と小石でオリジナルタコ壺をワークショップで制作。完成した後、すぐに海底に仕掛けることを前提に「実際に漁具として使う」という意識のもと制作した。

各自のタコ壺が完成した後に、漁師さんに漁で使用する結び方も教えてもらった。こうした作業中にもタコ壺や海に関する質疑応答で盛り上がり、より具体的に体験することでリアリティを伴うタコ壺漁や海への学びとした。



二日目は、前日に氷見市小杉浦に仕掛けたタコ壺を引き上げる体験を実施。参加者は漁師さんの漁船に乗り、蛸壺を引き上げ、実際に生きたタコを採る経験をした。前日に得た予備知識をもとに実作業することで、伝統と経験に裏打ちされたタコ壺漁の奥深さや、実際に海と向き合って命をいただく暮らしの一端を実感してもらうことができた。



採ったタコは近くの公民館で塩もみの後、ゆでダコにしたり、たこ焼きにしたりして、みんなで食した。魚食文化や生命の尊さへの体感を通じ、海の恵みに感謝する時間となった。

【来館者の声】

- 魚を思って漁をしているコトが分かった!!! Thank you (タコのイラスト付き)
- やかんのたこつぼ ビックリ!!! 船も乗った!!! いっぱいしれタコ。
- わかりやすく、船に乗れてよかった。

■魚の革づくりプロジェクト

【開催日時】平成28年4月～8月（合計20回）

【開催場所】ひみ漁業交流館 魚々座

【参加者数】のべ65人

【実施内容・目的】

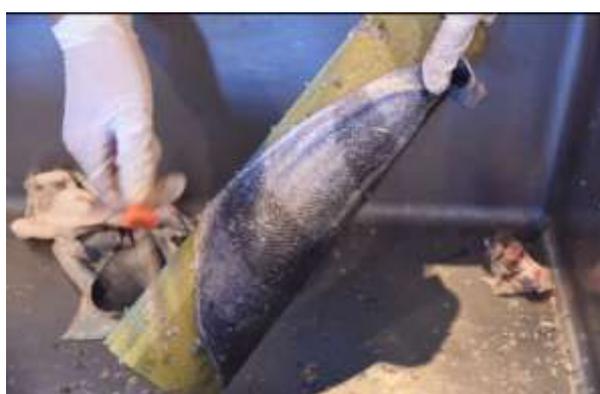
- 靴職人の釣賀愛さんを中心に、魚の皮をなめし革にするプロジェクトが行われた。プロジェクトチームを作り、隔週土曜日を中心にメンバーがあるつまり魚の革をなめす作業を行った。
- 地元の魚屋さん、釣り人から提供いただいた、様々な種類の皮を使って行った。試行錯誤の結果、ある程度強度がある魚の皮が完成し、企画展ではその革を使ってブーツやベビーシューズなどの作品が作られた。



開催場所の全景の様子



事前になめし工程を説明する



生の魚の皮から鱗や身を除く工程は食品の調理イメージに近く、大きい魚は身が厚く、処理に負荷がかかる。手に触れる事で、改めて「こんな形の鱗なんだ」と実感できる点が食べているだけでは見逃してしまうポイントである。



なめし工程に入ると科学実験のようになり「皮」は「革」に変質する。参加者は皮を柔軟で強度を持たせる技術指導を受け、次戦的な魚皮加工の技術を手を動かしながら学習した。



【来館者の声】

- 実際に魚の皮でサンダルを作ることで魚を全て利用して良いと思いました。
- 魚の皮のすばらしさを実感できた貴重な経験をさせていただきました。
- 海はその場所だけでなく全てと繋がっているため、海を守るということは山を守ることにもなる。

■魚の革で世界で一つだけのサンダルを作ろう

【開催日時】平成28年9月4日（日）、19日（祝・月）

10:00 ~ 15:00

【開催場所】ひみ漁業交流館 魚々座

【参加者数】10人

【実施内容・目的】

- なめし工程から始め、足に合わせたサンダルの制作まで、靴職人の指導のもと参加者が使用するサンダルを自身で一貫して作り上げる。魚皮が革へ変容する様子を体験し、作り上げたものを使用することで素材の興味を喚起する
- 日本でほとんど行われていない貴重な魚皮加工技術の理解・習得を促し、素材としての魚皮の普及・発展を図る。



開催の様子



サンダルは靴に比べ平易な工程で実用的なものに仕上がるので回数の少ないワークショップにおいて興味を持って一通りの技術を学ぶのに適している。

革に型紙を合わせて型紙のアウトラインに革を切る。補強用の革に接着剤を塗布して、魚皮とはり合わせる作業をする。裁断の工程においては、魚種によって切れ味が違うなど手作業によって魚の素材としての特徴を理解することができる。



サンダル作りワークショップは各自なめした皮に着色を施した状態で持参、型紙に合わせて切り、はり合わせるために叩く。補強のための皮に縫い合わせて、革のパーツを作成していく。



革製品の加工技術をふんだんに使い、単なる装飾として魚革を用いるのではなく、日常で用いることができる実用品としてのサンダルにまで仕立て上げていくことを学習する。

【来館者の声】

- 普段捨ててしまう魚の皮がこんなファッショぶるな物ができるなんて感激しました。
- エコで格好いい！サカナ最高！

■ 「テンマッチレース」

【開催日時】平成28年9月11日（日） 10:00 ~ 15:00

【開催場所】上庄川周辺

【参加者数】24名

【目標・内容】

- 木造和船 天馬船2艘によるマッチレース「テンマッチ」を開催した。子どもからベテラン漁師まで参加出来るようにコースを設定した。
- 海の潮の流れがある川の河口をマッチレースの会場とする為、ただ櫓を操るだけでなく、潮や風、波を読みながら櫓こぎを行う必要があり、自然の難しさを体感する機会となった。



開催場所の様子



説明の様子



和船を漕ぐことで、波・風・潮の流れを体感することができ、知識でとらえていた海に対する情報とは違った、波と風と潮を読みながら海と向き合う事で体感する、複雑かつ魅力的な海という存在を再発見することができた。



様々な年齢層が集まる大会で、時には一緒に船を漕ぐことを通して、和船をきっかけとした世代間交流が生まれた。また、川で遊ぶことをきっかけに、川と海のつながり、生活と海の関わりなどに興味を持ち、海に親しむきっかけとなった。

【来館者の声】

- 実際に船を漕いでみて、支援との共存について考えさせられた。
- 海、川、風、すべてが繋がって成り立っていることを知った。海はその始まりであり、執着であり、とにかく海を大切にしたいと思った。
- （船をこぐのは重労働で）漁師さんは大変だけど、優雅だったんだろうな。

■うろこで作ろう！アクセワークショップ

【開催日時】平成28年10月2日（日）、9日（日）
10:00～12:00

【開催場所】ひみ漁業交流館 魚々座

【参加者数】12人

【実施内容・目的】

- 魚皮を生成する際に落とした魚鱗を染色したものを材料に使い、軽快で美しいイヤリングやピアスなどのアクセサリ制作を手を動かして学び、海洋由来のプロダクトを身につけることで海への興味を喚起する。
- 本来不要物として廃棄される魚鱗を身につけるものへと転用した時の意外性に気づき、海洋資源の新たな活用方法を学習する。



開催場所の全景の様子



魚皮を生成する際に落とした鱗は染色専門家の指導でカラフルに染められ、一般的な魚鱗のイメージはない。ワークショップ参加者は各自オリジナルのデザインを決め、レジンという樹脂を塗り乾燥させるといった工程を通じ、魚鱗にじっくり触れることで普段破棄してしまっている魚の一部を観察でき、廃棄するものという認識から宝石の原石のように扱えることを学ぶ。



レジン硬化させた魚鱗に穴を開け金属のパーツに固定してアクセサリーとして完成させる。オリジナルの一点もののアクセサリーを身につけることで海と海の生き物との関わりを常を感じさせる効果が得られた。

【来館者の声】

- 魚のウロコがこんな美しいなんて、自然はすごい。
- 海にぴったりの素敵なアクセサリーができた。
- キラキラした海からの贈り物ができあがって幸せです。

■ 定置網漁師さんと一緒に♪みんなで作ろう！“魚々”押し寿司

【開催日時】平成28年10月23日（日） 10:00～16:00

【開催場所】ひみ漁業交流館 魚々座

【参加者数】9名（うち子ども2名）

【実施内容・目的】

- ゲストに現役の定置網漁師を迎え、魚の加工・調理・実食を体験しながら、魚のことや漁のことなどのお話などにより、海と共に生きてきた地域の暮らしを案内する。この、「食べる」「知る」両方の体験を通じ、来館者は海からの恵みである魚食と深く関わって来た地域ならではの暮らしを次世代に継承することが出来る。
- 魚食文化と、海と山のめぐみ両方の循環で成り立つ氷見の自然の豊かさを通して氷見の海を感じてもらうため、氷見産の新米と旬の魚、旬の野菜を色とりどりに組み合わせで皆で1つの押し寿司をつくる。できあがったあとには皆で押し寿司パーティーを開く。魚の調理を実際に体験していただき、魚食の魅力や氷見の海の豊かさを訴求する。



開催場所の様子



漁師さんと一緒に魚をさばく様子



魚は、展示のカードの中から選んで準備。まず、今日用意された魚の名前や特徴を漁師さんから教わった。漁師さんの手ほどきにより、魚をさばくところからスタート。参加者は、魚の見分け方や魚のさばき方を聞きながら、実際の漁の話なども伺い、魚食文化・漁業文化への理解を深めた。魚をさばいた後、魚の酢漬けやしょうゆ漬けなどを作り、魚の加工方法を体験した。



魚のほか、米や旬の野菜（なるべく氷見産のものを用意）も準備し、氷見の海の豊かさが山の豊かさと深く結びついていることも感じてもらった。

材料の準備ができたなら、型にご飯を詰めてみんなで装飾。氷見の家庭でよく押し寿司が作られていることから押し寿司を選び、内容をアレンジした。型は地元によくあるかまぼこ店の1つからお借りした（富山のかまぼこ文化を象徴する、結婚式の引き出物等に使われる鯛の形のかまぼこ型）。また、魚のアラや余った魚を活用し、「かぶす汁」（漁師さんたちがその日の恵みで作る魚たっぷりの味噌汁）も作って提供した。参加者へのお土産として、今回型を借りたかまぼこ店のかまぼこを配布した。

このように地域の魚食文化を意識した材料・メニュー等を選ぶことにより、参加者は地域の魚食文化を認知、あるいは再認識した。また、調理のあとにこのような会食を行うことにより、世代間・地域間を超えた交流が生まれ、参加者は魚食に関する理解を深めるとともに、漁師さんとの親密な関係を深め、漁師さんを身近に感じる事ができた。ワークショップや会食の間には展示のカードやボードゲームを使って遊び、その日に使われていなかった魚を知るとともに、ボードに描かれた定置網を見ながらゲストである定置網漁師さんの実際の話聞き、氷見の海や魚についての理解を深める事ができた。

【来館者の声】

- 新鮮な魚を使ってのお料理は、とても美味しかったです。
- さばくのが大変だった。
- あじの皮を初めて手でむきました。思ったより簡単にできました。魚料理をもっとひんぱんにしようと思いました。

■ 「テント船遊覧」

【開催日時】平成28年10月30日（日） 10：00～14：00

【開催場所】上庄川河口

【参加者数】60名

【目標・内容】

- 権2丁、櫓3丁で漕ぐ全長9mの大型の和船「テント船」の乗船ワークショップ。全国でも珍しいテント船の乗船体験。船頭の合図で、かけ声を合わせてダイナミックに動く船を体験できた。
- 海に出て、波の動きや風を感じながら大型和船に乗ることで、かつての人々の暮らしに思いをはせるきっかけとなった。



開催場所の様子



説明の様子



大型のテント船を大人数で漕ぐダイナミックさを実際に見ることで、かつて人が海に向き合い暮らしていたこの場所のエネルギーを体感し、海とこの地域との深い関わり方を知る機会になった。



乗船客には、観光客はもちろん、地元からも、珍しさや懐かしさから子供や孫と一緒に乗船される方もおり、文化継承の機会となった。

【来館者の声】

- 漕ぎ体験できて嬉しかった。自然相手はやっぱり難しくて疲れた。
- 海の近くで育ち、海を感じて生きてきたことを改めて実感した。
- テント船を漕げて楽しかった。きれいな海を大切にしたいと思った。

【事業全体のまとめ】

- 和船とその復活までの成り立ちについて一連の展示ができ、和船文化やそれを取り巻く自然環境、つまり海への関心を促す企画展示ができた。和船をただ見るのではなく、触れたり乗ったりすることができたため、記憶に残る体験ができ、これによって船に乗る、海に出ることへの強い関心を持つきっかけとすることができた。特に船を上から吊るして揺らぎを体験できる展示は、室内にいながら船を通して海に親しむ良い機会になったと思う。
- ・タコ壺プロジェクトにおいては、日々おこるプロジェクトを重視した展示だったので、漁業関係者と深い関係を築き地域に密着した展示となった。またアーティストの視点を交えて、シンポジウムやワークショップなどを行うことができ、夏休み中の小・中学生の親子連れに、海との関わりが深いこの地域特有の学びとなる展示となった。
- 革を扱う職人や地元の魚屋と連帯し、魚を食以外の海の資源として新たに開発するところから見直し、新しい価値の発見と提示を可能にした。会場を魚々座内のオープンスペースに設置することで、2000人近くの参加者が展示を見て、食材とは違った角度から今まで見落とされていた価値を発見した。
- 海の学びのサポート事業を活用することにより、地域の魚の情報を集めたカードゲームを制作することができた。カードゲームを制作するだけでなく、それを使って遊ぶことを企画展として行うことで、スタッフを配置することができ、氷見の魚の話題をちりばめながらカードゲームを行うことを促すことができた。

3. 主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 氷見市	イベント開催場所
2. 氷見市立博物館	資料借用、和船に関するキャプションなどの監修
3. 船大工および元漁師	展示物製作および関連事業
4. 浜野功・伊豆哲夫・中田春男（漁師・タコ壺漁経験者）	タコ会議のスピーカー・タコ壺漁の体験協力及び取材協力
5. 藪田浦共同網組合	タコ壺漁リサーチにおける船の貸し出し
6. 日比野克彦（アーティスト）	タコ会議のスピーカー・ワークショップ指導
7. 富山県立氷見高校海洋科学科	海底におけるタコ壺取材
8. 釣賀 愛（靴職人）	フィッシュレザー発案者、研究者、展示物品制作
9. 野口 朋寿（大学院生）	纏うさかな展示物品提供
10. 与一郎鮮魚店	魚の皮提供
11. 高橋 嶺夫（染色画家）	鱗アクセサリー技術提供
12. EAT & ART TARO（アーティスト）	カード・ボードゲーム制作、展示制作
13. 左座 進介（地域おこし協力隊）	カード・ボードゲーム制作協力・写真提供
14. 島尾地区の魚に詳しい方々	魚に関する助言・ボードゲーム時の来館者との交流
15. 酒井 久則（定置網漁師）	押し寿司ワークショップでのスペシャルゲスト

4. 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 北日本新聞	「木造和船や漁具並ぶ」5月3日、「天馬船漕ぎタイム競う」9月13日など
2. 富山新聞	「氷見・湊川に天馬船」4月10日、「天馬船、櫓漕ぎ競う」9月13日など
3. 富山新聞	「たこつぼ漁、知ろう」7月1日
4. 北日本新聞	「オリジナルのタコつぼできた」7月6日
5. 北陸中日新聞	「タコつぼ 5色石で彩り」7月26日
6. 富山新聞	「魚々座のこどもタコ体験」8月14日
7. 富山新聞	「親子でタコ漁見学取れ立てを味わう」8月15日
8. 北陸中日新聞	「魚の皮の靴 個性光る」10月8日
9. 朝日新聞	企画展「纏うさかな展」10月11日
10. チューリップTV	中部のこれぞホンモノ
11. 朝日新聞	企画展「纏うさかな展」10月12日

以上